モノグラフ・高校生'92

vol. 36 高校生は変わったのか －1980年調査と比較して－

静岡大学教授　深谷昌志

目次

本報告書の要約 …… 2

第Ⅰ章　テーマ設定－1980年との比較－

1．発刊して12年 …… 4

2．1980年頃とは …… 5

3．調査のデザイン …… 5

第Ⅱ章　高校生としての生活

1．高校生活の満足感 …… 6

2．しあわせ感 …… 11

第Ⅲ章　生徒たちの進路選択

1．大学進学への見通し …… 14

2．一流大学卒の値打ち …… 19

3．社会人になってから …… 20

第Ⅳ章　将来の家庭生活

1．恋愛か見合いか …… 24

2．家庭の中の役割分担 …… 27

3．結婚後の暮らし方 …… 30

まとめに代えて …… 40

資料1　調査票見本 …… 41

資料2　学年・性別集計表 …… 55

＊おことわり：本文中に使用した写真は，本文・テーマとは一切関係ありません。

本報告書の要約

① 高校生活

全体として1980年より1992年のほうが先生との関係もよく（11.1%→15.5%），友だちとの間もうまくいっている（38.4%→47.1%）者が多い（p．8　図1）。

② 学校への印象

非行生徒が少なく（30.7%→42.8%），のびのびしている学校（24.3%→27.8%）という反応が増加している（p．9　図2）。

③ しあわせ感

現在はあまりしあわせではない。しかしこれから先，大学を出て，結婚し，子どもが生まれる頃がとてもしあわせになれるだろうという反応が増加した（p.12　図4）。

④ 進路選択

全体として1980年より志望大学の決定にあたり，あまり真剣に考えないようになりつつある（p.16　図6）。

⑤ 進学にあたって

1980年では「望みの大学でないところへ入ったら浪人する」と答えた者が64.1%に達した。しかし，1992年では29.1%となり，70.9%が「入れたその大学へ入る」と答えている（p.18　図7）。

⑥ 学歴の効用

一流大学の値打ちはこれからますます上がると思う者が，1980年の12.6%から1992年の21.9%と9.3%もアップしている（p.19　図8）。

⑦ つきたい仕事

ほとんどすべての項目で，1980年と比べ，つきたいと思う割合が低下している（p.22　図10）。

⑧ 結婚相手

男子の間に同じ年くらいの女性と結婚したいという気持ちが強い（p.26　図13）。

⑨　家事の担い手

1981年と比べ，洗濯や食事などのすべての項目で「妻が全部する」と思う割合がほぼ半減し，「妻がほとんどする」へ移行している（p.28　図16，p.29　表9）。

⑩　親との同居

歩いて10分くらいの距離での別居を望む者が多く，同居をする気持ちの生徒は28.2%から20.7%へと減少している（p.32　図19）。

⑪　結婚後の暮らし方

「妻の生活は家庭の中」という考え方が減り，子どものしつけを夫婦でするつもりの者が増加している（p.34　図22）。

⑫　2人だけでしたこと

1981年より1992年のほうが高校生たちの異性とのつき合いは増加している（p.38　図25）。

〔まとめ〕

10年一昔といわれる。しかし，高校生の意識は10年間にそれほど大きく変わらなかったように思う。しかし，大学進学に対する構えが変化したのが目につく。それと同時に，社会に対する達成意欲が弱まり，それと対比した形で家庭生活への関心が強まる傾向が顕著だった。夫と妻とが仲よく協力して家庭生活を築いていきたいというのが，高校生の未来像となる。ほほえましいと思いつつも，そうした反面，もう少し高校生らしく社会に目を向け，意欲をもやしてほしいと思った。その中でも特に，男子がやさしさを増したのはよいが，社会的な達成に自信を喪失しているのが気がかりになる。

〔調査概要〕

時期●1992年2月～3月

方法●学校通しによる質問紙調査

内容●1980年～1981年の「モノグラフ」の中から項目を抜粋して調査票を作成した。

対象●山形・新潟・東京・神奈川・静岡・長野・愛知・三重・大阪・兵庫・広島・山口・福岡・鹿児島・沖縄の高校1～3年生

サンプル数

（人）

	高1	高2	高3	小計
男子	586	620	110	1,316
女子	508	498	32	1,038
小計	1,094	1,118	142	2,354

第Ⅰ章 テーマ設定－1980年との比較－

1．発刊して12年

「モノグラフ・高校生」が創刊されたのは1980年であった。教育について論じられることは多いが，理論に走りすぎ現実をふまえていないか，それとは逆に，主観的な印象だけを語り客観性に乏しい。そのため，理論のぶつけ合いになるか，あるいは主観を語るだけで論議が深まることが少ない。そうした状況を視野に入れて，主として生徒のサイドから，現実の姿をレポートしたいと思ってスタートしたのが，このモノグラフ・シリーズだった。

それ以降，多くの方の支持を得て，「モノグラフ」の刊行を続けることができた。高校生の姿を求めて走り続けてきた感じがするが，なんとなく，このところ高校生が様変わりをしてきたように思う。

素直でいうことは聞くし，まじめな高校生なのはたしかだが，なんとなく頼りなく，意欲に乏しい。

しかし，そうした言い方は，われわれが年を重ね，高校生の若さについていけなくなったことから生まれるギャップなのかもしれない。

「モノグラフ」の初期のものを見ると，未熟かもしれないが，若々しいレポートが多かったように思う。考えてみると，現在，東大やお茶の水女子大などの助教授として売り出し中の研究者も，その頃，大学院生として同人会に参加していた。大半のメンバーは20代

後半から30代の疲れを知らないハングリーな研究者だった。

それだけに，現代の高校生に頼りなさを感じるのは，われわれサイドの老化を物語るようにも思われる。そこで「モノグラフ」のvol.1～4を引き出してきて，その中から現在でも通用する項目を選び，そのままの形で調査を行い，1980年と現在とで高校生が変化しているかどうかを考察したのが，今回の「モノグラフ」である。

2．1980年頃とは

今回の「モノグラフ」は1980年の調査を現在と対比させ，高校生の変化を求めようとしている。比較対象となった調査は，1979年から1981年にかけて実施されている。そこで，1980年頃というのはどういう時期だったのかをふり返ってみたい。

1979年というと，西城秀樹の「YOUNG MAN」，ツイストの「燃えろいい女」がヒットした年である。テレビの「3年B組金八先生」が人気を集めていた。そして，1980年になると，山口百恵の結婚が社会的な関心を集め，その年の1月，北京からパンダのホアンホアンが来園している。「クレイマー・クレイマー」や「地獄の黙示録」の公開された年でもある。

1979年12月にソ連のアフガニスタン侵攻があり，1980年6月の総選挙では大平首相が急死し，その影響もあってか，自民党が284議席を獲得し圧勝した。

教育面では，1979年から国公立大学共通一次試験が実施されたのと，その頃，校内暴力や家庭内暴力が急増し，大きな社会問題となったのを思いおこす。

なお，黒柳徹子の「窓ぎわのトットちゃん」，田中康夫の「なんとなく，クリスタル」がベストセラーとなり，「ルビーの指環」（寺尾聰），「恋人よ」（五輪真弓）がヒットしたのが1981年である。

このようにふり返ってみると，1980年頃というのは，日本中が若々しく活気にあふれていたように思う。バブルなどという言葉もなく，エネルギッシュにおとなたちがまじめに働き，そして社会に活気があり，豊かで明るい時代であった。

そう思ってみると，わずか10年を過ぎただけだが，われわれの調査チームだけでなく，日本全体が若々しさをなくした感じがする。

3．調査のデザイン

調査票作成にあたっては，vol.1～4の「モノグラフ」の中から，現在でも通用し，そして比較して分析するのに適しているように思われる項目を選び出した。結果としては，「高校生の描く未来像」（vol.1）と「異性・結婚・家庭」（vol.4）から多くの項目をとりあげることになった。

また，これらの調査は，いわゆる進学校を対象とした調査であったので，今回も調査対象として，進学校を選定することにした。

第Ⅱ章 高校生としての生活

1．高校生活の満足感

それでは，高校生としての生活は1980年と1992年とで，異なっているのであろうか。

表1に学業成績についての自己評価の結果を示した。すでにふれたように，今回の比較にあたって，同じレベルの進学校を対象に選んである。

そして，そうしたサンプルが妥当であったようで，表1によれば，学業成績についての評価は10年前とほとんど変わっていない。つまり，前回，そして今回のサンプルとも進学校のふつうの生徒たちが全体の多くを占めていることがわかる。

それでは，高校での生活に変化がみられるのであろうか。図1（表2）に示したように，10年前と比べ，先生との関係にやや満足している生徒が増加している。それ以上に，友だちとの関係に満足している割合が1980年より8.7%アップしている。

1980年代は，校内暴力がピークを迎えた頃で校内は騒然としていた。それと比べ，現在は高校が安定している。したがって，学校生活はかつてより楽しいのであろうか。

それでは，現在の高校について，生徒たちはどう評価しているのか。1980年と比べ，プラスしている項目とマイナスになった項目とを対比させると，以下の通りとなる（図2，表3）。

① 1980年よりプラスになった項目

1．非行する生徒が少ない
2．学校全体がのびのびしている
3．熱心な先生が多い
4．学校の雰囲気がよい

② 1980年よりマイナスになった項目

1．進学に意欲的な生徒が多い
2．勉強する生徒が多い
3．誇りをもっている生徒が多い

進学に意欲的な生徒が減り，それにかわって学校の雰囲気がのびのびとしてきたという変化である。

1980年代の初め，学校は荒れていたかもしれないが，そうした一方，熱心に受験する生徒も少なくなかった。そして現在，学園はおだやかさを取り戻した。好ましい変化のような気持ちもするが，こうしたデータに，このところの公立校の衰退と私立校の台頭を感じるといえば誇張にすぎるだろうか。残念ながら，東京近郊では，いわゆる私立の進学校に人気が集まっている。そして，そうした私立の進学校では大学進学に意欲的な生徒が多いと聞く。そう考えると，のびのびとした高校生活を送っているという結果に心からよろこべないのを感じる。

表1　学業成績（10年前と比べて）

（%）

	トップのほう	上位から10%くらい	上位から3分の1くらい	まん中くらい	中の下くらい	うしろのほう
英語	3.7	8.7	16.6	26.4	19.1	25.5
	3.9	8.8	18.2	28.8	19.8	20.5
数学	3.0	9.1	17.9	24.8	21.8	23.4
	3.1	8.5	19.7	27.2	19.4	22.1
国語	2.6	7.8	18.4	32.9	20.0	18.3
	3.1	6.3	17.8	35.4	20.1	17.3

上段＝1980年
下段＝1992年

図1　高校生活の満足感（10年前と比べて）

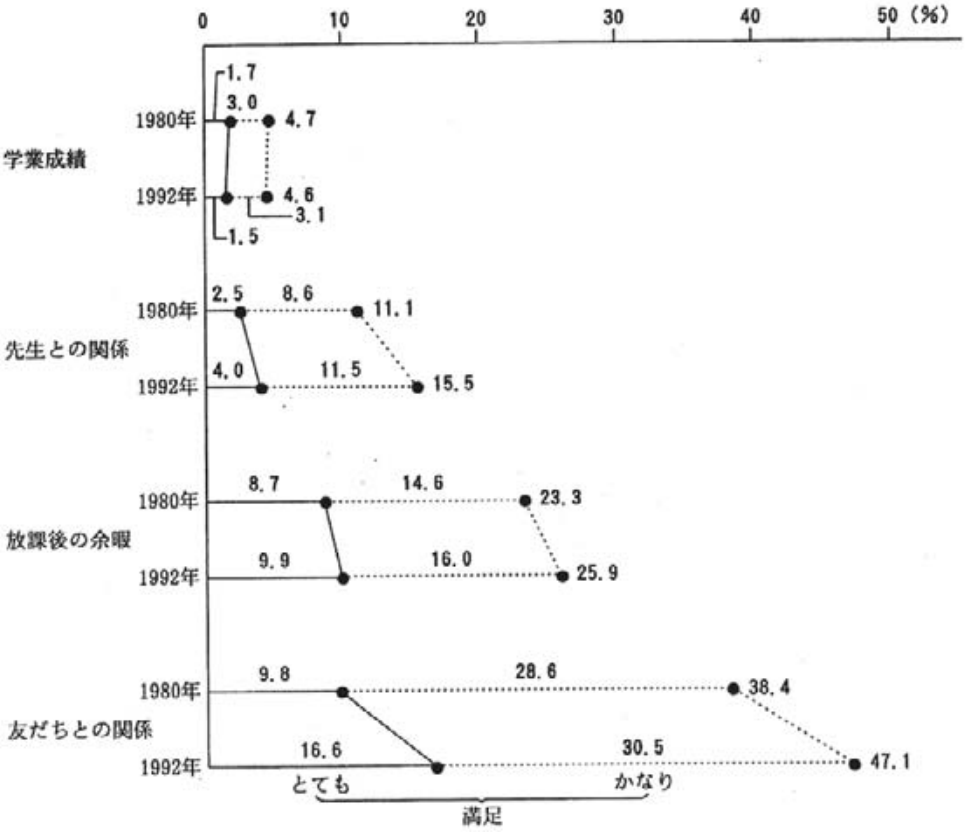


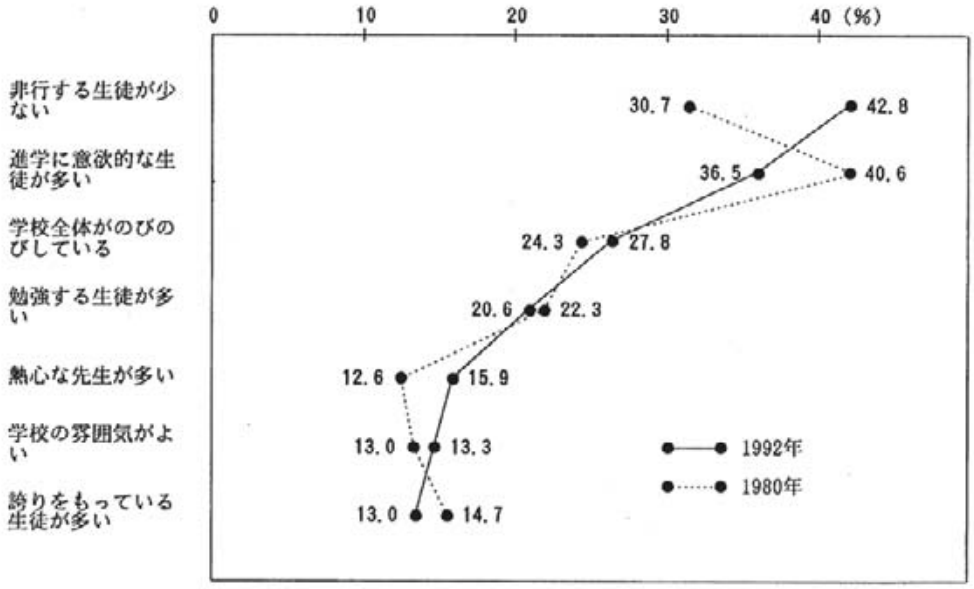
表2　高校生活の満足感（10年前と比べて）

（%）

	とても満足	かなり満足	やや満足	やや不満足	かなり不満足	とても不満足
友だちとの関係	9.8	28.6	38.7	14.9	4.1	3.9
	16.6	30.5	37.4	10.6	2.9	2.0
放課後の余暇	8.7	14.6	31.9	26.4	10.2	8.2
	9.9	16.0	34.7	23.6	8.9	6.9
先生との関係	2.5	8.6	42.2	28.0	9.6	9.1
	4.0	11.5	51.0	22.3	5.5	5.7
学業成績	1.7	3.0	12.8	28.8	28.3	25.4
	1.5	3.1	15.8	31.0	25.1	23.5

上段＝1980年
下段＝1992年

図2　現在の高校について（10年前と比べて）



（「とてもそう思う」割合）

表3　現在の高校について（10年前と比べて）

（%）

	とても そう思う	まあそう 思う	半分半分	あまりそう 思わない	ぜんぜん そう思わない
礼儀正しい生徒が多い	30.7	48.4	12.0	6.1	2.8
	42.8	44.4	9.1	2.6	1.1
進学に意欲的な生徒が多い	40.6	36.7	13.5	5.0	4.2
	36.5	37.1	19.4	5.7	1.3
学校全体がのびのびしている	24.3	34.1	21.7	13.2	6.7
	27.8	36.8	18.3	12.2	4.9
勉強する生徒が多い	22.3	36.1	26.5	11.5	3.6
	20.6	36.6	29.0	11.4	2.4
熱心な先生が多い	12.6	34.4	31.4	15.0	6.6
	15.9	39.1	28.6	12.6	3.8
学校の雰囲気がよい	13.0	41.7	25.3	12.6	7.4
	13.3	48.7	24.9	8.9	4.2
誇りをもっている生徒が多い	14.7	31.4	29.6	17.6	6.7
	13.0	30.2	30.4	20.5	5.9

上段＝1980年
下段＝1992年

2．しあわせ感

それでは，高校生たちは現在，しあわせな毎日を送っているのであろうか。**図3**によれば，「やや」を含めると47.3%が「しあわせ」と答えており，「ふしあわせ」と思っている者が18.7%と2割を下回っている。

したがって，半数近くがしあわせと思っているようだが，そうしたしあわせ感は1980年と比べ，ほとんど変わっていない。

しかし，しあわせ感をこれまでとこれからと対比させて調べてみると，**図4**（**表4**）の通りとなる。子どもの頃はかなりしあわせだったが，現在が一番しあわせでない。大学受験を控えて，毎日勉強をしなければならない。どう考えても楽しくない生活だ。しかし，将来はしあわせになれそうで，特に結婚して子どもができる頃は，さらにしあわせになりそうだというのが，高校生たちの将来の見通しとなる。

そして，しあわせ感の見通しは1980年と1992年とで，それほど変わりはない。しかし，図4を見ると明らかなように，子どもの頃は楽しかったという気持ちは，昔の高校生のほうがそう思っている。そして，現在の高校生たちは子どもの頃はともかく，これから先しあわせになれるだろうと思っている割合が高い。これまで勉強，勉強で過ごしてきたけれど，大学に入りさえすれば，なんとかなる。そして，それから先はしあわせになれそうだという。

なお，「結婚して，子どもができる頃のしあわせ」を属性別にクロスしてみると，**図5**の通りとなる。学年別にみると，高3の生徒が子どもが生まれる頃，それほどしあわせでないと思っているのが注目される。受験学年になると，今がしあわせと思えない。それだけに，未来の感じも暗くなるのであろうか。

そして性別については，女子たちが子どもが生まれる頃はしあわせだろうと思うなど，結婚にあこがれを抱いているのがわかる。

図3　今，しあわせ（10年前と比べて）

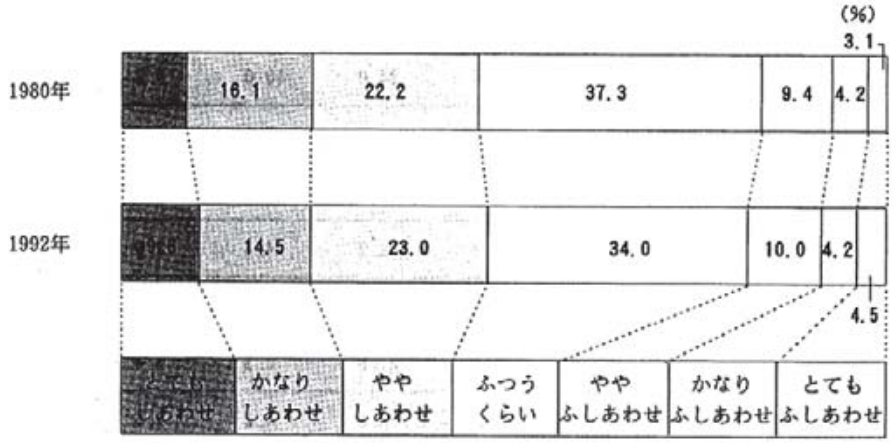
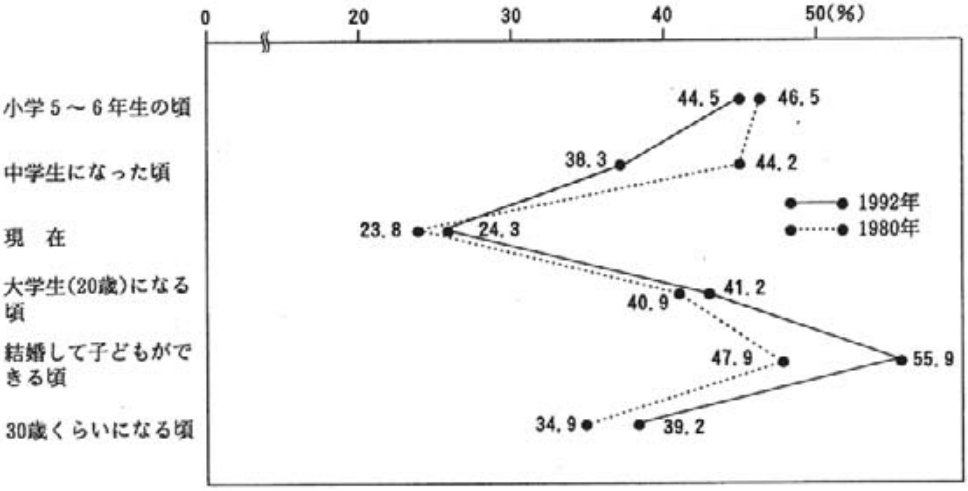


図4　しあわせ感の推移（10年前と比べて）



（「とても＋かなりしあわせ」の割合）

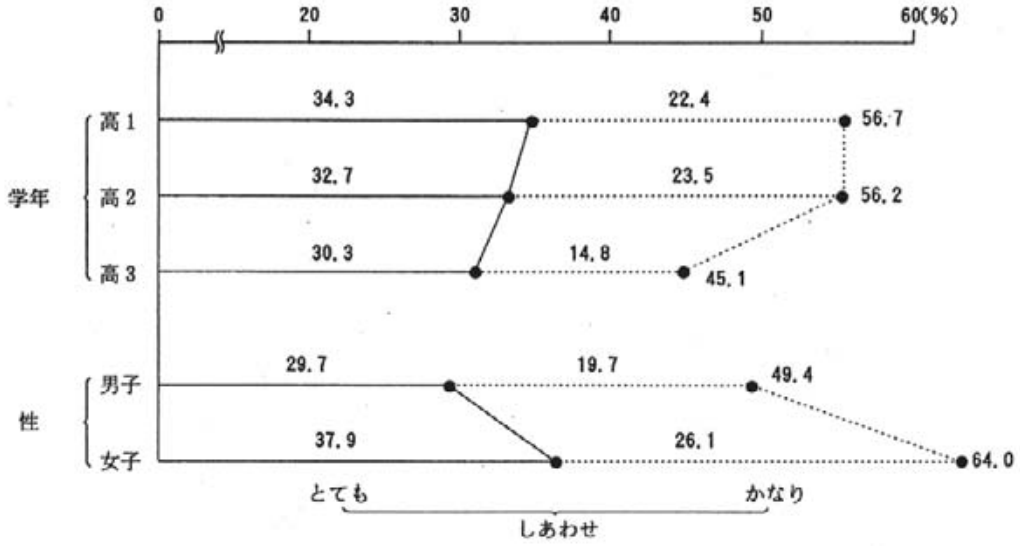
表４　しあわせ感（10年前と比べて）

（%）

	とても しあわせ	かなり しあわせ	やや しあわせ	ふつう くらい	やや ふしあわせ	かなり ふしあわせ	とても ふしあわせ
小学５～６年の頃	21.3	25.2	19.7	24.5	5.1	2.0	2.2
	21.5	23.0	19.8	25.5	5.7	1.8	2.7
中学生になった頃	15.9	28.3	25.6	21.1	4.5	2.6	2.0
	15.6	22.7	24.8	24.8	6.8	2.4	2.9
現　在	7.7	16.1	22.2	37.3	9.4	4.2	3.1
	9.8	14.5	23.0	34.0	10.0	4.2	4.5
大学生(20歳)になる頃	17.2	23.7	25.2	24.4	5.1	2.4	2.0
	19.4	21.8	26.3	26.5	3.7	0.9	1.4
結婚して子どもができる頃	25.9	22.0	19.4	22.2	4.4	2.9	3.2
	33.4	22.5	18.5	20.3	2.3	1.0	2.0
30歳くらいになる頃	15.9	19.0	21.9	27.8	6.3	3.4	5.7
	20.5	18.7	23.1	28.6	4.6	1.6	2.9

上段＝1980年
下段＝1992年

図5　結婚して子どもができる頃のしあわせ × 属性



第Ⅲ章 生徒たちの進路選択

1．大学進学への見通し

高校生たちは，いずれ進学の時を迎える。将来の進路は表5の通りだが，同じ進学校でも1980年は4年制大学への進学率が82.3%であった。そして，1992年では84.7%と，進学率が2.4%アップしている。それと同時に私立大学への進学希望が倍増しているのが注目される。

	1980年	1992年
国立大学	70.7%	> 61.5%
私立大学	11.6%	< 23.2%
4年制大学	82.3%	< 84.7%

私立大学への人気集中を物語るような傾向が上記の数値からうかがえるが，それでは，どういう気持ちで志望大学を決めようとしているのか。

全体として，入学がむずかしそうで，就職がよさそうな，いわゆる一流大学を目指す生徒が多い。しかし，1980年と対比させたとき，1992年のデータではそうした傾向が薄らいでいる（図6，表6）。

何がなんでもこの大学へという気持ちが薄くなり，どの大学でもいいから，どこか適当なところへ入りたいという生徒が多くなっているのであろう。

そこで，1と2との対の形で，大学進学にあたって，どういう選択をするのかをたずね

てみた。結果は図7の通りだが，1980年と比較して，1992年の特徴を要約すると，以下の通りとなる。

① 1980年より数値が上がった項目

1．地元の国立大より東京の有名私立大へ

1980年　1992年

29.7%＜44.5%

2．寄付金を出して補欠入学をする

60.1%＜71.8%

3．親の望む法経学部より自分の入りたい文学部へ

77.4%＜79.9%

② 1980年より数値が下がった項目

1．すべり止めの大学へ入るより浪人する

64.1%＞29.1%

（浪人するよりはすべり止めの大学へ）

2．仲よし3人組の中で1人だけランクの低い大学へ入ったら浪人する

55.6%＞24.0%

（入れたら大学へ入る）

3．電子工学志望で，電子工学科のない大学と専修学校では，専修学校へ行く

64.9%＞55.4%

（学科がなくとも大学へ）

こうしたデータでも，何がなんでも志望の大学へというのではなく，入れそうなら入れる大学へ入るというように，大学進学の意味が軽くなり，とにかくどこかへ入ろうという気持ちが強まっている。

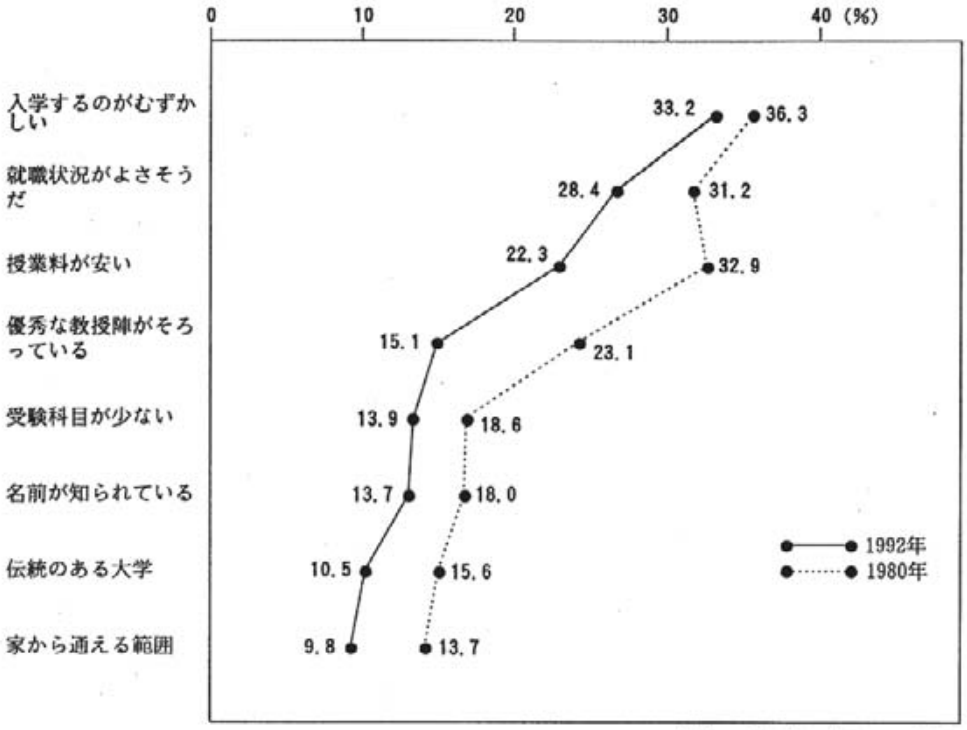
もっとも，見方によれば，こうした現象は大学進学がむずかしさを増し，大学を選ぶなどというぜいたくなことをいえないと思うくらいに生徒たちが追い込まれてしまっているのかもしれない。1992年の大学受験はベビーブーマーといわれ，戦争直後に生まれた世代の子どもたちが受験期を迎え，史上もっとも大学が狭き門になったといわれる。そうした状況をみていて，高校生はとにもかくにも大学だけは入れるところに入ろうと思っているのかもしれない。

表5　卒業後の進路（10年前と比べて）

（%）

	1980年	1992年
4年制大学（国立）	70.7	61.5
4年制大学（私立）	11.6	23.2
短　大	4.5	4.8
専修学校・各種学校	3.3	2.3
就　職	1.2	1.4
家　業	2.0	0.2
その他	0.1	1.6
まだ決めていない	6.6	5.0

図6　志望大学を決めるとき（10年前と比べて）



（「とても大事に考える」割合）

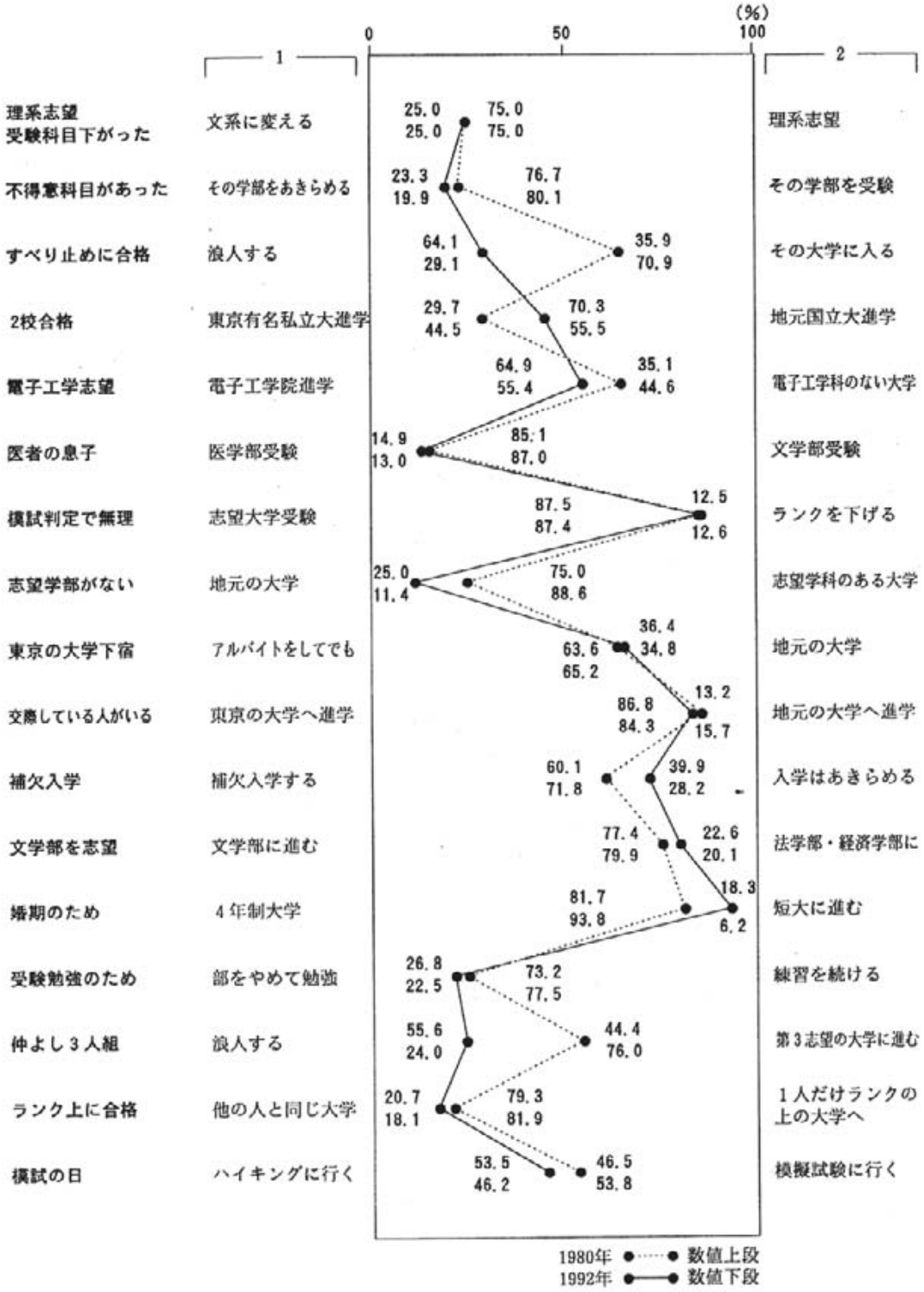
表6　志望大学を決めるとき（10年前と比べて）

（%）

	とても大事に考える	まあ大事に考える	あまり大事に考えない	まったく大事に考えない
入学するのがむずかしい	36.3	38.0	17.7	8.0
	33.2	42.6	18.5	5.7
就職状況がよさそうだ	31.2	42.2	17.5	9.1
	28.4	47.2	18.8	5.6
授業料が安い	32.9	41.2	17.1	8.8
	22.3	47.5	22.1	8.1
優秀な教授陣がそろっている	23.1	34.1	29.9	12.9
	15.1	35.2	38.2	11.5
受験科目が少ない	18.6	34.2	33.0	14.2
	13.9	36.8	36.2	13.1
名前が知られている	18.0	47.7	26.0	8.3
	13.7	49.2	28.1	9.0
伝統のある大学	15.6	36.2	32.3	15.9
	10.5	33.6	38.9	17.0
家から通える範囲	13.7	25.7	30.0	30.6
	9.8	21.9	32.1	36.2

上段＝1980年
下段＝1992年

図７　大学進学にあたっての選択（10年前と比べて）



2．一流大学卒の値打ち

実際に，「一流大学卒という値打ち」が，「これから上がるか」，それとも「下がるか」についての見通しについて，生徒は**図8**のように答えている。

この10年の間に，一流大学のレッテルのもつ意味は，全体として低くなっているように思う。しかし，生徒たちの場合，「値打ちが上がる」と思う者が1980年は12.6％にとどまっていたのに，1992年には21.9％に達している。

生涯学習の時代を迎え，大学は通過機関化しており，値打ちは低下しているのは事実であろう。少なくとも一流大学卒というレッテルだけで人生を送れるほど，あまい時代ではないのだが，これから受験する生徒たちにはそう思えない。「一流大学」がひかり輝いて見えるのであろう。

なお，**図9**によると，さすがに一流大学卒の効用がこれからも高まると思っているのは，学年別では高1生，そして学業成績別では上位より中位のほうに，つまり，一流大学へ遠い生徒たちのほうが，学歴の意味を高く評価している。それに対し，高3，あるいは成績上位層のように，一流大学へ手の届きそうな生徒たちが，学歴の効用を否定的にとらえているのが注目される。

自分が入れそうもないと思うと，学歴の重みが感じられるのであろうか。いずれにせよ，かなり多くの生徒が，学歴の効用をかなり高く信じているのがわかる。

図8　一流大学卒（10年前と比べて）

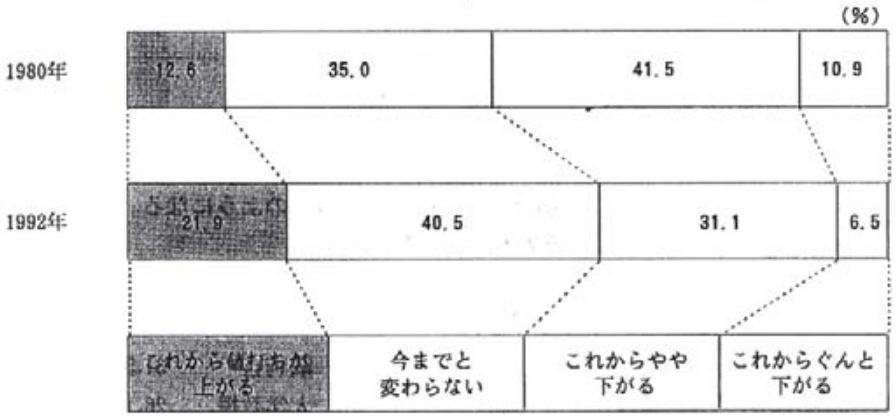
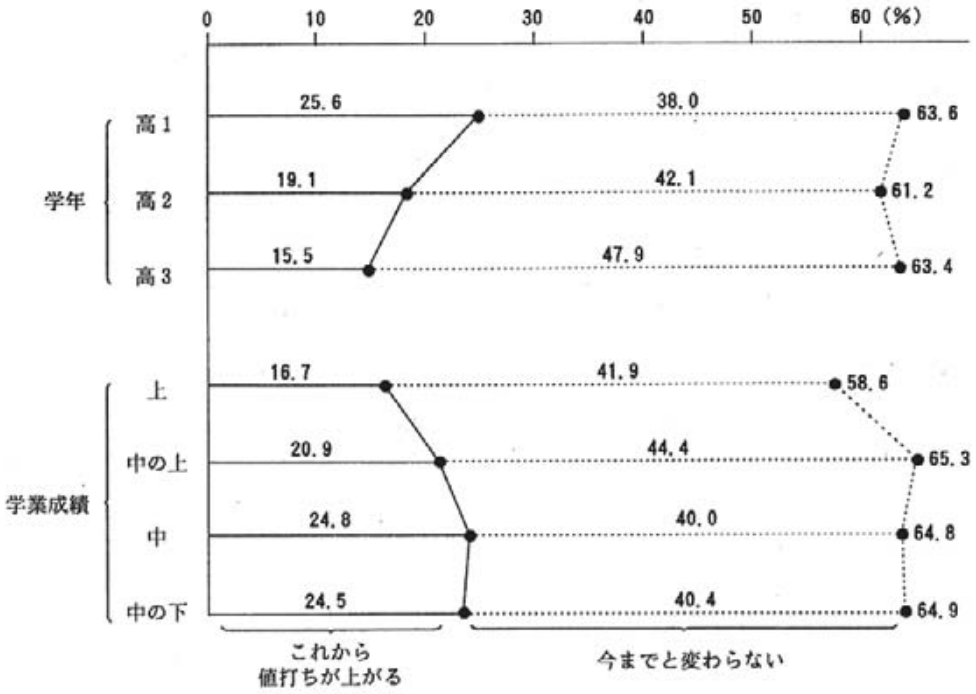


図9　学歴の予測 × 属性



3．社会人になってから

大学卒というレッテルはこれから先も高まっていくと思っている高校生たちは，将来，どういう生き方をしようとしているのか。

表7によると，「どんな会社に入りたいか」について，「実力第一主義で，大きな仕事のできる会社」と答えている。そして，そうした見方がこの10年くらいの間にほとんど変わっていないのが注目される。

なお，「つきたい仕事」についての結果では**図10**のように，どの仕事に関しても，1992年のデータは1980年の結果を下回っている。大学教授になりたい者が，1980年の26.1%から1992年の16.1%へ，あるいは設計士が24.4%から16.0%へというように，すべての項目について「なりたい」数値が低下している。

そうした中で，1992年と1980年とで数値の開いた職種と開いていない職種とを対比させると，以下のようになる。

① 1980年より低下の大きい職種

	1980年	1992年	92／80年
1．裁判官	31.5%→	18.2%	57.8%
2．大学教授	26.1%→	16.1%	61.7%
3．設計士	24.4%→	16.0%	65.6%

② 1980年とあまり変わらない職種

1．アナウンサー	20.4%→	18.9%	92.6%
2．サラリーマン	20.4%→	18.6%	91.2%
3．地方公務員	26.9%→	21.3%	79.2%

こう見てくると，10年の間に高校生たちのやる気が減少して，生徒たちは身近な達成しやすいゴールを設定しているように思う。

念のために，いくつかの職種について，なりたい割合を属性別にクロスさせると，**表8**の通りとなる。全体として，ビッグな仕事を目指そうとする者が少ない。

10年の間に，高校生たちが小粒になったといえばよいのだろうか。入れそうな大学へ入り，無理をせず，高望みをしないで，地道に仕事をしていくという生活スタイルをもつ高校生である。こうした生徒に「大志を抱け」といったところで，時代錯誤の念仏と思われるのがおちなのかもしれない。

表7　入社したいか（10年前と比べて）

（%）

	ぜひ入社したい	できたら入社したい	どちらでもない	あまり入社したくない	ぜんぜん入社したくない
実力第一主義	24.7	37.5	28.5	5.0	4.3
	29.6	38.9	25.0	4.1	2.4
大きな仕事のできる会社	23.1	43.3	25.3	5.3	3.0
	22.3	47.0	24.7	4.3	1.7
給料のよい会社	20.1	41.5	27.7	6.5	4.2
	17.5	46.7	26.7	7.1	2.0
名の通った一流企業	3.1	16.3	40.9	25.7	14.0
	4.0	22.3	41.7	23.0	9.0
安定した会社	3.7	15.8	31.0	29.8	19.7
	3.4	15.8	31.8	33.5	15.5

上段＝1980年
下段＝1992年

図10　なりたい職種（10年前と比べて）

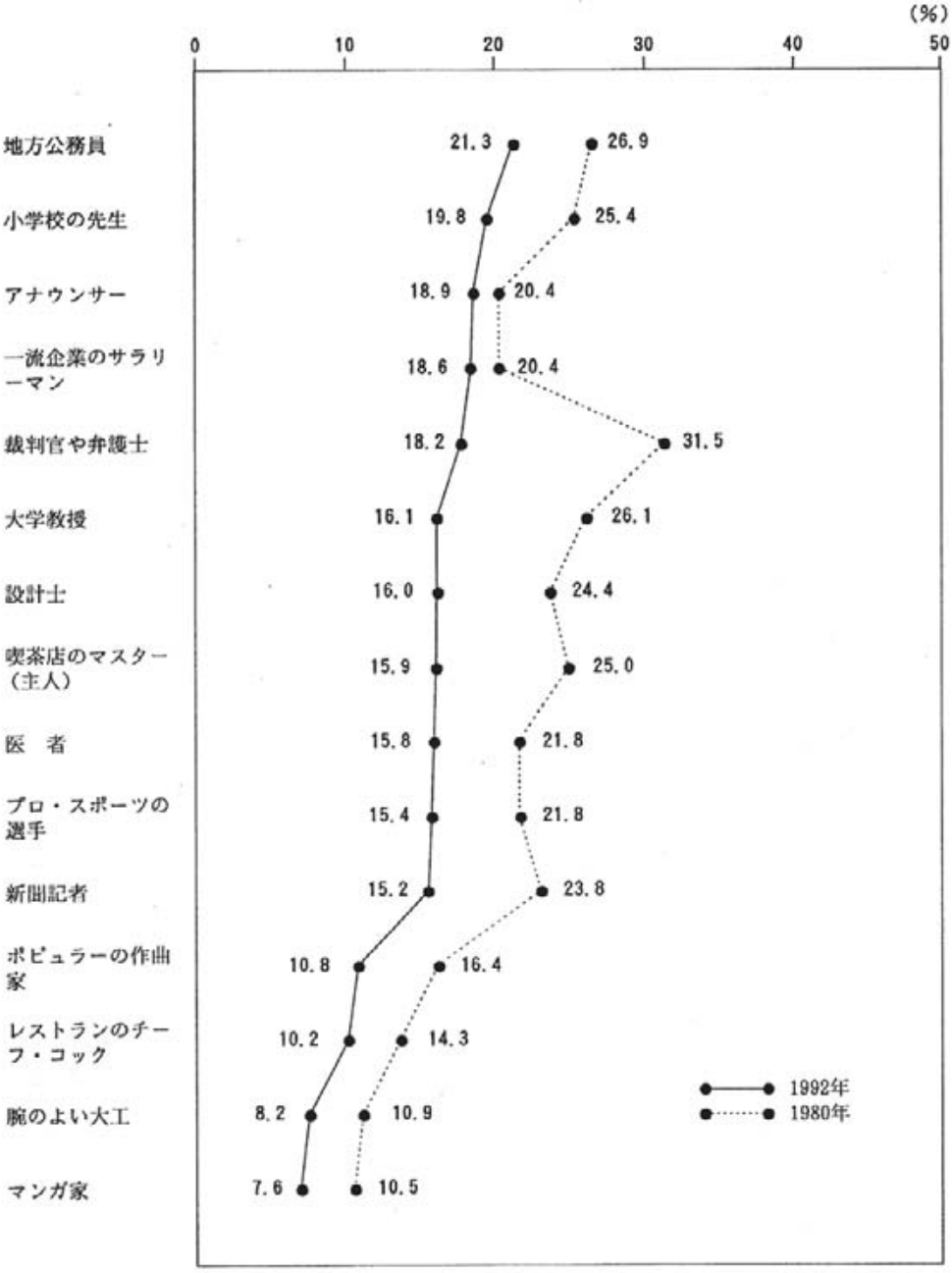


表8 なりたい職種 × 属性

(%)

		裁判官	医　者	大学教授
学年	高1	19.5	17.7	14.1
	高2	15.8	13.5	16.4
	高3	27.3	18.9	28.7
性	男子	20.1	16.1	18.7
	女子	15.8	15.3	12.9
進路	就職	28.1	18.5	9.4
	専修学校	3.7	18.5	5.6
	短大	7.0	10.9	1.8
	私大	16.8	17.3	13.1
	国立大	20.0	16.2	19.3
学業成績	上	27.3	18.7	16.7
	中の上	19.2	20.0	21.2
	中	16.8	13.9	21.9
	中の下	16.1	12.1	23.3
	下	15.5	14.2	20.4